

No.180

2017.
3.15

岐阜の博物館



岐阜県 50th
博物館協会
Gifu Museum Association

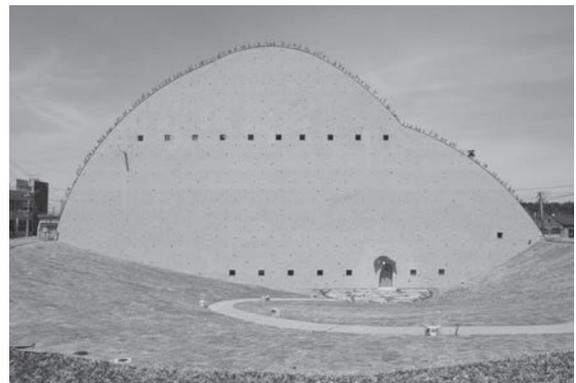
多治見市モザイクタイルミュージアム ～「建築の力」と地域連携

多治見市モザイクタイルミュージアム 展示事業グループ 村山 閑

タイルや陶器関係の工場が点在する住宅地の中にこつ然と現れる異形の建物に、多くの人々が歓声を上げてカメラを取り出します。ここで撮影された写真の多くがインターネット上で共有され、新たな来場者を呼び込む。五十嵐太郎氏が建築評（毎日新聞2016年11月24日夕刊）にて述べておられたように、まさに「建築の力」が集客を生み出していることがわかる光景です。

多治見市モザイクタイルミュージアムは、全国一のモザイクタイル生産量を誇る多治見市笠原町に所在します。多治見市との合併前から約20年もの時をかけて、町の有志が収集してきたタイルの見本台紙やタイル張りの製品などを、広く一般に公開し、タイルの魅力を発信するために建設されました。タイル業界の関係者が手を取り合っ、市を動かし、藤森照信氏のデザイン・設計に持ち込むまでの経緯には、数多くの苦労があったと想像されます。加えて今現在も活発な生産を目指している産業として、製品のアピールの場となることも求められました。本格的な産業振興の場というあり方は、公益性を求める博物館・美術館と相反する側面であり、まだ両者を共存させる仕組みづくりが十分にできていないのが現状ですが、施設運営の両輪となればさらに新しい取組ができるようになることが期待されます。

ここでは博物館的な準備活動に焦点を絞ります。2014年、学芸担当が着任し建設が公表され、表立った準備活動を開始しました。そもそもタイル、特にモザイクタイルは、建物の外装や内部空間に使われることで存在意義を発揮します。タイルだけを取り上げた、ケースや展示台を用いる一般的な展示で何が伝えられるのか、困難が予想されました。しかし、調べるうちに、郷愁とともにタイルに着目するコミュニティが、昨今のSNSの普及を通じて各地に点在していることがわかってきました。そこでプレイベントなどの準備活動にあたっては、いわゆる展示事業だけにこだわらず、様々なコミュニティから情報をいただき、地域の人々と協働



多治見市モザイクタイルミュージアム外観

©Akitsugu Kojima

する取組を重視して進めました。

2014年から2015年にかけて、市内の既存の施設を使わせていただいた企画展示は、小規模ながら4度にわたりました。その他、多治見市が主催となる陶磁器関係のイベント等ではPRブースを設けて広報活動を実施、モザイクタイルを貼り付ける工作体験なども折々に開催し、タイル業界の関係者がボランティアで協力していただきました。中でも愛知県陶磁美術館が事務局となった文化庁の文化芸術振興費補助金「建築装飾としてのタイル・陶壁が生きる街を記録と記憶に残すプロジェクト」に参加できたことは、活動の幅を大きく広げる結果となりました。加えて多治見市学習館や笠原中央公民館などが、独自にタイルをテーマとするイベントを実施、また、個人の持ち込み企画によって収蔵品のタイルを使ったPR展示が複数の府県で実施されて連携の形ができる等、周囲のタイルに対する関心の高さを感じました。

振り返れば、何より人と人とのつながりが、この施設の開館準備活動を支えてきたことが感じられる2年間となりました。一方で、開館以来の予想を上回る集客の要は、何より冒頭で述べた「建築の力」であり、タイルそのものの持つ懐かしさや愛らしさにあります。それでも準備期間中に築かれた連携は無駄ではなかっただろうと考えております。

第64回全国博物館大会に参加して

期 日：平成28年11月16日～18日
場 所：群馬県高崎市 群馬音楽センター

第64回全国博物館大会が「博物館をつなぐ、世界がつながる—未来が見える—」をテーマに、約400名が参加し開催されました。会場の群馬県は世界遺産富岡製糸場と絹産業遺産群を有する世界に誇れる歴史と文化が数多く残る地です。



基調講演では、富岡製糸場名誉顧問・総合研究センター所長今井幹夫氏から「世界文化遺産『富岡製糸場』の歴史と現在の取組」について講演をいただきました。全国博物館フォーラムでは、文部科学省・文化庁の施策が紹介され多様化する経営形態や博物館登録制度の在り方に関する調査研究報告書などについて説明し、フロアからの発言も求めながら協議がなされました。シンポジウムでは、「博物館をつなぐ—豊かな未来に向けて—」と題して、2019年ICOM 京都大会、熊本地震による文化財被災状況、リニューアルオープンした群馬県立歴史博物館、福島県の文化連携プロジェクト、ミュージアムパーク茨城県自然博物館の教育普及活動について実例を交えながら紹介されました。パネリスト及び参加者は、今後の博物館の対話と連携の在り方について考え、議論を深めました。分科会では、全国博物館フォーラム及びシンポジウムを受けて、分科会毎に「博物館と学校教育をつなぐ」（分科会1）「博物館と地域をつなぐ」（分科会2）「博物館をつなぐITの利活用」（分科会3）のテーマで事例が発表され、その後、議論を深めました。

2017年は九州の大分県で開催が予定されています。

(光ミュージアム 吉井隆雄)

平成28年度東海地区博物館連絡協議会 日本博物館協会東海支部総会

期 日：平成28年7月28日（木）
会 場：大垣市奥の細道むすびの地記念館
参加者：神奈川・岐阜・静岡・愛知・山梨の5県から50名（岐阜は20名）

今年度の総会は、俳人松尾芭蕉が「奥の細道」紀行を終えた地、大垣市船町で行われました。会場である「奥の細道むすびの地記念館」は大垣市制90周年を記念し、憩いと賑わいの空間づくりの拠点として2012年に建てられたものです。

施設は4つのエリアに分かれており、芭蕉の紀行文「奥の細道」の紹介や芭蕉の人となり、その人生について紹介する「芭蕉館」、大垣藩の重鎮小原鉄心など大垣の歴史、文化を代表する偉人を解説する「先賢館」、また大垣と西美濃地域の観光情報や、全国の芭蕉に関連した施設を紹介する「観光・交流館」、小原鉄心の別荘で市の指定文化財である「無何有荘大醒樹」の4つの建物をめぐることができます。

総会においては、昨年度の事業報告と決算報告、そして今年度の事業計画、予算案が提出され、承認決定されました。また岐阜県博物館協会の創立50周年記念事業についての説明もなされ、参加者には記念誌が配布されました。

その後、学芸員の解説を聞きながらの館内見学が行われ、また講演会では、弘前学院大学の准教授である生島美和氏をお招きして、「岐阜県出身・棚橋源太郎が博物館の世界に果たした役割」と題し、現在の博物館の基礎を築いた棚橋源太郎について人となりも含めてお話いただきました。

懇親会は若干参加者が少なめではありましたが、その分落ち着いてゆっくり話をすることができました。

各館で行われている様々な取組や、抱えている問題について話し合うなど、大変有意義な時間を過ごしました。



(世界淡水魚園水族館 圓戸恭子)

第41回東海三県博物館協会研究交流会 「ミュージアムへ行こう!」・・・魅力的な誘客とは ーミュージアムがもつ可能性を考えようー

期 日：平成28年12月2日（金）
会 場：四日市市立博物館
参加者：55名（岐阜県8名）

今回の研究交流会は、変化する社会情勢の中で、ミュージアムの立ち位置を認識し、より多くの人に活用していただくための取組を交流することを目的にして開催されました。



研究交流会の前半は3館からの事例報告、後半はグループセッションでした。

まず、四日市市立博物館廣瀬毅氏、四日市公害と環境未来館大杉邦明氏による「博物館の再発見～そらんば四日市として～」は、各施設のテーマを一貫させ誰もが学べる空間にし、観光や研修利用の呼びかけが利用者増加に繋がったとの報告でした。次に、名古屋市博物館藤井康隆氏による「名古屋市博物館における外部連携の試み」は、外部連携の事例が挙げられ、中でも旅行会社との協力は誘客の相乗効果があったとの報告でした。最後に、多治見市モザイクタイルミュージアム村山閑氏による「多治見市モザイクタイルミュージアム 誘客から交流へ」では、開館に向けて行ったイベントが、新たなプロジェクトへと発展し、また、SNSでの情報発信を積極的に行ったり、特徴的な外観が話題になり「インスタジェニック」と呼ばれ画像が拡散したりしたことが、誘客につながったとの報告でした。

各館との交流を通して、多様な連携、情報発信など、可能性を広げるための積極的な取組を行っていることが分かりました。

（岐阜市科学館 安田晋一郎）

第148回 公開講座

期 日：平成28年8月20日（土）
会 場：日下部民藝館
参加者：約80名
講 師：杉山享司（日本民藝館学芸部長）

岐阜県高山市の市街地に位置する日下部民藝館は、元禄の中頃より高山を代表する商家日下部家の旧宅です。平成28年に開館50周年、また日下部家住宅重要文化財指定50年を迎えるにあたり、民藝館の原点に立ち返り、暮らしの美、「民芸」を見出した柳宗悦およびその思想に共感し自らの創作活動に活かした作家たちの作品を展示した「日下部民藝館開館50周年記念展～柳宗悦と民藝運動の巨匠たち～」が8月20日から9月30日まで開催されました。その記念講演会：演題「柳宗悦と心の友」の中で杉山部長は、「柳宗悦によって生み出された民芸の考え方は、宗悦一人の思想だけではここまで広がりにはなかった。柳の思想に共鳴したバナー・ド・リーチ、濱田庄司、河井寛次郎、芹沢銈介、棟方志功といった美の本質を追及した作家らが柳の良き理解者であり協力者であり心の友であった。」と語られました。

（光ミュージアム 吉井隆雄）

第91回 研修会・日本展示学会研究集会

期 日：平成28年10月6日（木）
場 所：多治見市モザイクタイルミュージアム・笠原中央公民館
参加者：26人

近年、複数の地域博物館が連携をとりながら地域の身近な資源を多角的にとらえ、総合的・包括的に地域の文化をとらえる取組が盛んになってきていることをふまえ、「連携する博物館と展示」をテーマに、3名の講師による事例報告が行われました。会場となった多治見市モザイクタイルミュージアムの村山閑さんが開館に至るまでの過程や展示内容、現在の取組について報告されました。下呂市教育委員会の馬場伸一郎さんは、岐博協記念事業企画委員会「たかめる部会」の立場から、県博協創立50周年地域連携事業「ネットワーク・街道」への取組について、他館との連携や今後の課題について報告されました。愛知県陶磁美術館の佐藤一信さんは、INAXミュージアム・博物館明治村・多治見市モザイクミュージアムと連携して、建築としてのタイルや陶壁が生きる街を記録と記憶に残す「タイル・陶壁プロジェクト」について報告されました。3名の講師の方がそれぞれの立場から報告された博物館同士、あるいは博物館と地域との連携について、参加者はみな高い関心を持って聞き入っていました。

（岐阜市歴史博物館 吉田晋右）

岐阜県博物館協会創立50周年事業企画委員会報告

「50周年事業」から今後の展開

委員長 可児光生

協会創立50周年事業は一過性のものではなく、今後の組織の質的向上のためのきっかけにしなければならないと思います。

あらためて検討された協会の理念と方針をベースに、人々や社会に必要とされる博物館及び博物館協会になれるような事業を長期的視点で進めていきたいと考えます。

まず、今までそれほど緊密でなかった加盟館のネットワークを築いていくことが必要です。県内の圏域ブロックごとに地域に根付いた活動ができるような新たな体制作りが望まれます。次に、今日的課題である地域資源の保存と活用について協会として光をあてることです。地域の心のよりどころを大切にしていこうという博物館本来の役割が果たせるよう協会全体で取り組みます。

協会の様々な活動を進めるには幅広い視野と交流が必要です。今以上に県内外の関係団体とも情報交換し、互いに刺激し合って協会活動を発展させていきたいと思えます。

「ひろめる部会」によるミュージアムスタンプラリーの実施について

ひろめる部会長 原田義久

岐阜県博物館協会では、加盟する多様な形態のミュージアムを多くの方に知っていただき、歴史、民俗、芸術、自然科学などの資料に触れる機会を増やすため、ミュージアムスタンプラリーを実施しています。協会加盟館のうち、ラリー実施館54館をまわってスタンプを集めていただくものです。スタンプ10個を集めるごとに各地区にある拠点館で記念品を進呈しており、すべてのスタンプを集めた方には認定証を発行します。

昨年、7月16日にスタートしたスタンプラリーでは、11月に最初の達成者が現れました。達成者の方には、ふだん訪れ



ることができないミュージアムにスタンプラリーをきっかけとして訪れることができ、新たな発見があったとの感想をいただいています。

スタンプラリーは本年8月31日まで実施していますので、さらに多くの方の参加をお待ちしています。

「たかめる」部会平成28年度事業報告

たかめる部会長 正村美里

「たかめる」部会では、加盟館職員の資質向上、関係機関との連携、館同士のネットワークの強化を目的に、地域連携企画「街道・ネットワーク」を開催、岐阜エリアから7館、西濃6、中濃12、東濃12、飛騨16、計53館が参加、内訳は、企画展32、通年展示14、シンポジウムやワークショップ等イベントが11事業でした。ポスター兼チラシを1万部作成し、50周年記念事業において配布しました。



この成果については10月6日開催の日本展示学会研究集会・岐阜県博物館協会第91回研修会で、副部会長である馬場委員が発表を行い、取りまとめの手法、連携のための道筋づくりについて反省点を含めて報告しました。

また、もうひとつの事業の柱であるミュージアム・レスキューについては、5月28日の通常総会において、規約に「災害時における会員の所蔵資料の救済を情報収集」の一文が加えられ、当協会のミュージアム・レスキュー事業が正式にスタートしました。50周年記念事業会場にて活動要項の素案を掲示、7月11日には、岐阜県美術館の防災対応研修に委員2名が参加。9月21日独立行政法人国立文化財機構から文化財防災ネットワーク推進事業への協力依頼を受け、主幹館である京都国立博物館と岐阜県教育委員会社会教育文化課の担当者で連絡会議を行いました。

12月7日には、岐阜大学教育学部博物館資料論・被災汚損紙資料の洗浄 W.S. に、12月13日には、京都国立博物館で開催された文化財防災ネットワーク推進事業中部・近畿文化財関係者による文化財防災連絡会議にそれぞれ委員が出席、情報収集を行いました。平成29年2月1日には、第7回たかめる部会を開催、事業の反省会と今後の課題と方向性を協議しました。

館・園紹介 No.161・162

とうしん美濃陶芸美術館

〒507-0014 岐阜県多治見市虎渓山町4-13-1
とうしん学びの丘“エール”内
電話/0572-22-1155 FAX/0572-22-1197

東濃信用金庫の研修施設「とうしん学びの丘“エール”」内に併設された美術館で、平成27年5月開館いたしました。当金庫が美濃陶芸作品永年保存事業として購入した選定作品、現代陶芸作家の茶碗のコレクションなどを展示して美濃の陶芸文化を発信しています。

美術館のシンボルツリーでもある大王松を中心に建てられた円形状の美術館



で、人間国宝の加藤孝造氏が制作した陶壁が来館者をお迎えしています。

(とうしん美濃陶芸美術館 金子賢治)

杉原千畝記念館

〒505-0301 岐阜県加茂郡八百津町八百津1071
電話/0574-43-2460 (代)
FAX/0574-43-2460

杉原千畝は、第二次世界大戦が始まった1939年からリトアニアの首都カウナスで領事代理を務めていました。彼は1940年7月、ポーランドからナチス・ドイツの迫害から逃れ、日本の通過ビザを求めて集まってきた数千人のユダヤ人ら避難民に対し、国の訓令に背いてビザを発給し尊い命を救いました。彼の行動は国の政策や自身の職、命の危険よりも人道を選んだ行動として国内はもとより世界中から賞賛されています。

千畝の出身地である八百津町は、彼の功績を顕彰し、また後世に伝える事を責務と考え、彼の生誕100年にあたる2000年7月に「杉原千畝記念館」を開館しました。

記念館には、千畝の発給した「命のビザ」をはじめ、彼の生い立ちやユダヤ人の足跡を紹介する写真パネルのほか、当時の領事館執務室を再現した「決断の部屋」があり、ビザ発給当時を回顧する千畝の肉声を聞く事ができます。

(杉原千畝記念館 山田利幸)

談論風発 (協会員のリレートーク) 協会員の話題の中からヒントが見えてくる

登録有形民俗文化財

「美濃の陶磁器生産用具及び製品」

登録への道程

瑞浪市陶磁資料館 砂田晋司

平成28年3月2日付けで瑞浪市陶磁資料館が収蔵する陶磁器生産用具2983点と製品850点が国の登録有形民俗文化財に登録されました。

この登録に至るまでに約2年という歳月を要してしまいましたが、その原因は当館の資料の管理状況にありました。

すなわち、ある資料が何時・誰から寄贈されたのか、何処でどのように使用されていたのか等の情報が失われている資料が少なからずあり、登録に必要な資料目録の作成に時間を要してしまったのです。

多くの資料が30年以上も前に収集されたこと、また一時期学芸員が不在であったこと等がその要因ですが、当館の元職員や専門委員など、多くの方の協力を得て聞き取り等を行うことで、ごく一部の資料を除いて、何とか資料目録を完成させることが出来ました。

この経験から感じたことは、人材＝学芸員を継続的に配置することや、収蔵資料の情報を正確に共有し、管理していくことの重要性はもちろんです。博物館がいかに多くの人に支えられているか(支えられてきたか)ということでした。

博物館は資料の収集や調査研究、展示など、実に多くの方々の善意によって支えられており、決して職員や学芸員のみで成り立っているものではありません。多くの方の善意に応え、信頼関係を築いていくことで構築されるネットワークが、博物館の貴重な財産であることを確信した道程でした。

今後、陶磁器生産用具という地味な民俗資料を、魅力的に分かりやすく展示するという形で、協力していただいた方たちに恩返しをしたいと思います。

最後になりましたが、この度の登録にあたり、厳しくも温かいご指導をいただいた文化庁の石垣調査官、また岐阜県教育委員会(当時)の宗宮氏に心から感謝を申し上げます。



図書紹介

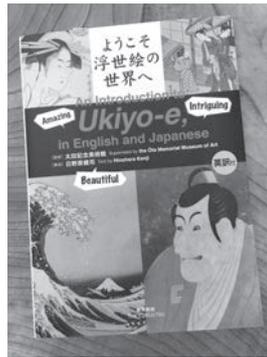
会員のお薦め図書

中山道広重美術館 中村 香織

『ようこそ浮世絵の世界へ』

(公益財団法人太田記念美術館監修、
日野原健司解説、東京美術、2015)

私の勤務する中山道広重美術館は、その名の通り歌川広重の作品を中心に収蔵する浮世絵専門館です。「浮世絵」のことを全く知らない、という方はおそらく少ないのではないのでしょうか。北斎は米ライフ誌の「この1000年で最も重要な功績を残した世界の人物100人」に日本人で唯一選ばれていますし、写楽の代名詞ともなっている「大谷鬼次の奴江戸兵衛」はあまりにも有名です(眉を吊り上げ、着物の懐から手をぬっと突き出した役者の絵です)。しかしその実、浮世絵が木版画だとお伝えすると驚かれる方も少なくありません。



COOL JAPAN 熱が高まりを見せ、日本文化の再評価がなされる昨今、浮世絵もまた徐々に人気が高まってきています。せっかくだから、この機に浮世絵について少し学んでみませんか、ということで本書をご紹介します。海外の方への入門書という位置付けですので(全文英語対応付き!), 浮世絵鑑賞の基本のキをわかりやすく、簡単に、しかもきれいな図版付きで紹介しています。

本書は3部構成になっていて、個人的にオススメなのが、浮世絵の主題を紹介している第2部です。そもそも浮世絵とは「浮世(現世、今の世の中)の絵」のことですので、浮世絵の中には江戸のポップカルチャーがふんだんに盛り込まれています。粋な着物に下町グルメ、美男美女に愛くるしい動物たちなど、現代の私たちが見ても心躍るあれこれが生き生きと描かれています。また、美術品としての視点で浮世絵を見る際は、ぜひ職人たちの超絶技巧にもご注目ください。第3部には彫り・摺りの技術が紹介されており、浮世絵には絵師だけでなく、高度に熟練した職人の技が不可欠であったことがよくわかります。

浮世絵は決して難しいものではありません。私たちがアイドルのグッズやコミック本、ファッション雑誌を買うように、当時の人々も気軽に手に取り、楽しむものでした。本書は浮世絵の楽しみ方を教えてくれる絶好の教科書になるはずですよ。

博物館協会 インフォメーション

岐阜県博物館「博物館学芸講座」における 講演の募集について(次回募集の案内)

岐阜県博物館の講演会は、学芸員の日頃の研究成果の発表の場として、また全国的にも著名な研究者を招聘してのハイレベルな講演会として広く県民の皆様から好評をいただいています。そこで、県内の博物館等で活躍されている学芸員や関係職員の皆様にも、日頃の研究成果を発表する機会として、当館での講演を1月に募集したところです。

については、次回の募集を平成29年5月頃に行いたいと考えています。

是非、その機会に日頃の研究成果を発表されてはいかがでしょうか。ご検討ください。

【問合せ先】

岐阜県博物館 学芸部 講演会担当
住所 〒501-3941 岐阜県関市小屋名1989
TEL 0575-28-3111 (内線305)
FAX 0575-28-3110

岐阜県博物館協会 ホームページへの情報掲載のご案内

新着情報への掲載依頼については、各月20日までに協会事務局(gpma@mopera.net)までメールにて連絡ください。

【投稿内容】

自館の情報ではなく、博物館学に関する内容や異種館にも共通する内容とします。例えば、館が行う研修会の他館参加のお誘い情報、博物館等に関する講演会の情報、行事等の運営やマネジメントに関する研修会報告、等々です。

編集後記

協会機関紙No.179号から新たに加わった「談論風発」、「図書紹介」等の記事について、多くの関係者の皆様から好評をいただきました。この機関紙が、会員相互のつながりを強め、各館の活性化への一助になればと思います。次号も引き続き会員の声を記事にしていきます。皆さんからのご意見やご感想をお待ちしております。

編集兼発行：岐阜県博物館協会
〒501-3941 関市小屋名(岐阜県博物館内)
TEL:0575-28-3111 FAX:0575-28-3110